

「できる！」を目指した体育学習

～ボール運動ゴール型での中心となる動きを焦点化して～

名古屋市立東築地小学校 酒井伸行

1 この実践を通して、どんな子どもに育てたいか。

私は、できるようになるために粘り強く活動が続ける子ども、すなわち『「できる！」を目指す子ども』を育てたいと考えている。自ら積極的に課題を解決することができたという成功体験を数多く味わうことができれば、運動する楽しさや喜びが実感できたり、困難なことに直面しても、「やればできる」という自信が培われたりすると思うからである。

しかし、どのような動きを目指して活動すればよいのかわからず、ただ漠然と運動に取り組み、「課題を解決したい」という意欲が低下してしまうことがある。このようなときには、目指す動きを明確にもち、その動きを身に付ける練習が順序よく効果的に行われることが大切であると考え。また、課題に直面した子どもが、課題が明確に把握できないために、自分の動きをどのように変化させればよいのかわからなく、活動が停滞してしまうことがある。このようなときには、自分の動きを的確に振り返り、目指す動きに近付けるために、どんなことを意識して、どのように体を動かせばよいのかという課題解決への見通しをもたせることが大切であると考え。

そこで、本実践では「ゲームを楽しむために必要な中心となる動き」を明確にして、目指す動きにつながる課題を子どもがはっきりともてるようにした上で、以下の2点に留意して、実践を進めることにした。

- 中心となる動きを身に付けることができる授業の流れの工夫
- 自分の動きを確かめることができる振り返り活動の工夫

2 授業をどのように計画し、実践しようとしたか。

(1) 対象学年・単元 6年生(38人)・ハンドボール

(2) 中心となる動きの設定

ハンドボールは、ボール操作が比較的容易であり、ドッジボールなど今までのボール運動経験を生かしやすい。そのため、ゲーム中における動きながらのボール操作や、ボールを受けるための動きを学びやすい教材であり、ゴール型の身に付けるべき技能にもつながると考える。そこで本研究では、このような特性を生かした学習内容になるよう、「ゴール型」における中心となる動きを、ゲーム中における「ボールを持った時の動き」と「ボールを持っていない時の動き」と定めて実践を行った。具体的に以下のように設定し実践を行った。

【中心となる動き】

「ボールを持った時の動き」

- ・ ゴール前のシュートを狙える空いた場所でシュートを打つこと。
- ・ 攻撃をしている方向で、ディフェンスのいない空いた場所にいる人や、そこに走りこんでいる人にパスをすること。

「ボールを持っていない時の動き」

- ・ 攻撃をしている方向で、パスを受けることができる空いた場所に動くこと。

(3) 指導計画：全8時間

	1	2	3	4	5	6	7	8
10分	①スキルアップドリル (三角パス・ランニング三角パス・パス&シュート) 【手だて1：中心となる動きを身に付けるために必要な基本的なボール操作練習】							
25分	試しのゲーム	②タスクゲームⅠ (4対2のアウトナンバーゲーム) 【手だて1：中心となる動きを身に付けるためのタスクゲーム】 →ディフェンスのいない場所がたくさんある中での攻撃練習。			②タスクゲームⅡ (4対3のアウトナンバーゲーム) 【手だて1：中心となる動きを身に付けるためのタスクゲーム】 →チャレンジゲームと同じ形式による攻撃練習			
40分		③チャレンジゲーム {4対4 (攻め4人, 守り3人・キーパー1人)} 【手だて1：中心となる動きを生かした試合形式のゲーム】						
	振り返りタイム【手だて2：自分の動きを確かめることができる振り返り活動】							

(4)具体的な手だて

ア 中心となる動きを身に付けることができる授業の流れの工夫

前述した中心となる動きが効果的に身に付くように、以下のようなねらいをもって授業の流れを考えた。

《①スキルアップドリル》

初歩的な投捕の技能、動きながらの投捕の技能や、走りこんでボールを捕り、止まらずに勢いを生かしてシュートを打つ技能など、基本的なボール操作の技能を高めるための運動を毎時間授業の最初に行った。それぞれの運動における技能のポイント(表1)は、第1・2時に子どもたちに伝えて、中心となる動きを身に付けるために必要な基本的なボール操作の定着を図った。

【表1】子どもたちに伝えた技能ポイント

【三角パス】

投：相手の腕をねらって相手の捕りやすい高さで投げる。
捕：手のひらを相手に向けてボールを包み込むように捕る

【ランニング三角パス】

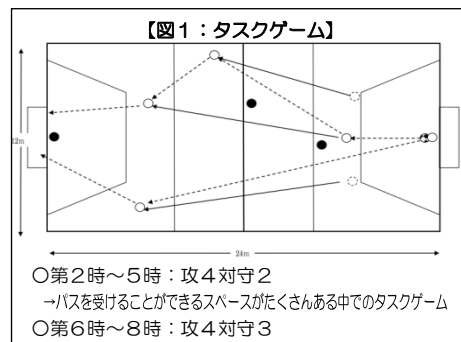
投：相手の走っている少し先をねらって投げる。
捕：走りながら、相手に手の届かないように捕る。

【ボンバースhoot】

走りこんでパスを捕り、止まらず勢いを生かしてシュートを打つ。

《②タスクゲームⅠ・Ⅱ》

本実践では、タスクゲームにおいて、相手チームのゴールに向かった動きを伴った攻撃の展開を目指したタスクゲームを考えた(図1)。スキルアップドリルで高めた基本的なボール操作の技能を生かすことができるように、毎時間授業の中盤でタスクゲームを行った。攻撃だけ練習する時間を取ることで、ゲーム中に



における「ボールを持った時の動き」と「ボールを持っていない時の動き」を意識して繰り返し練習に取り組めるようになり、中心となる動きが、ゲームに生きる動きとして定着することをねらった。その時に、「ボールを持った時の動き」である、ゴール前の空いているシュートの狙える場所でシュートを打つことや攻撃をしている方向で、ディフェンスのいない空いた場所にいる人や、そこに走りこんでいる人にパスをすることを意識して取り組ませるようにした。また、「ボールを持っていない時の動き」である、攻撃をしている方向で、パスを受けることができる空いた場所に動くことを意識して取り組ませるようにした。

本実践のタスクゲームは、授業後半のチャレンジゲームに身に付けた動きを生かしやすいように同じコートでタスクゲームを行った。また単元の前半(第2時～5時)では、攻め4人守り2人で行い、シュートがねらうことができたり、パスを受けることができる空いた場所を見つけやすくしたりした。単元の後半(第6時～8時)では、チャレンジゲームと攻守の人数が同じになるようにして、より実戦に近い形でタスクゲームを行うことができるようにした。

《③チャレンジゲーム》

タスクゲームで身に付けた動きを生かして、実際のゲームで自分の動きを試すゲームを行う。自分の身に付けた「ボールを持った時の動き」と「ボールを持っていない時の動き」が実際にゲーム中で有効かどうかを確かめることをねらって、チャレンジゲームを毎時間授業後半に行った。攻4人対守4人(DF3人、GK1人)の形式で行った。試しのゲームでは20m×10mのコートで行ったが、コートの広さが人数に対して狭かったため、第2時から、24m×12m広さで行った。

3人のディフェンスに対して4人で攻めることにより、アウトナンバーの状態を作り、フリーなプレーヤーが常にいる状態にして、中心となる動きが出現しやすくした。また、今までの実践から、ボール運動の得意な子どもだけがパスをつないだり得点をしたりする姿が多く見られた。その一方で、技能低位の子どもはボールを持たず、得点にかかわる機会が少なかった。そこで、本実践では「ビンゴボーナス」というルールを作り、前後半合わせてチームの全員が1点以上取ることができたらそのゲームは勝ちとなるようにした。

イ 自分の動きを確かめることができる振り返り活動の工夫

本実践では、「できる！」を目指して活動に取り組ませるために、まず、「できる」姿を具体的に示した評価シートを作成した。そしてその評価シートをもとに本時の自分の動きを自己評価しながら現状を認識させる。そしてそこから、目標である動きに向けて具体的な課題を考えさせ、次時の授業に臨ませるようにした。また、子どもが考えた課題に対して、指導者が朱書きを入れ、子どもの考えを認めたり、修正したりすることによって、身に付けさせたい動きにつながる課題をはっきりと減ることができるように援助していった。

今日の自分について

名前 _____

めざす：ボールを持った時の動きを覚えよう、
ボールを持っていない時の動きを覚えよう。

★ボールを持った時の動きについて	
レベル	自分の動きについて（できたかな？）
3	ゴール前でパスをもらってシュートを入れたり、ディフェンスのいないスペースにいる仲間からパスをもらうことができた。
2	ゴール前でパスをもらって、ゴールを射らぬようにしたり、ディフェンスのいないスペースにいる仲間を呼びつけてパスをしようとしていたりすることができた。
1	パスがもらえなかった。パスをもらってもマークのいない仲間を呼びつけることができなかった。

↓

（もっと良い動きを目指して次の授業で、ボールを持った時にどんな動きをすればよいのか考えてみよう。）

★ボールを持っていない時の動きについて	
レベル	自分の動きについて（できたかな？）
3	（シュートを打つために）ゴール前でディフェンスがいないスペースに走り込み、パスをもらうことができた。ディフェンスがいないスペースに走り込んでパスをもらうことができた。
2	（シュートを打つために）ゴール前でディフェンスがいないスペースでパスをもらったり、（パスをつなげるために）ディフェンスがいないスペースでパスをもらうことができた。
1	パスをもらえなかった。パスをもらってもマークのいない仲間を呼びつけることができなかった。

↓

（もっと良い動きを目指して次の授業で、ボールを持っていない時にどんな動きをすればよいのか考えてみよう。）

具体的な動きを、3段階で記述をした。レベル2がB評価とした。本時の動きが、どの段階のものであるかを自分で認識するために、自己評価をさせる。

自己評価の結果から、さらに上のレベルの動きを目指す時に、どのような動きを意識すればよいか、今の動きからどのような動きに変えればよいかなどを記述させ、次時に行かすことができるようにする。

3 実践をどんな内容で行い、子どもはどう変容したか。

(1) 中心となる動きを身に付けることができる授業の流れの工夫

活動の様子（2／8時）

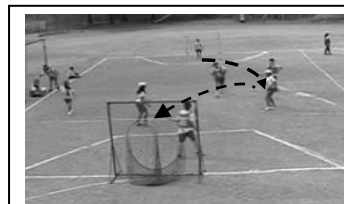
第1時に、試しのゲームを行って、ハンドボールのゲーム形式やルールなどを教えた。その時には、ボール運動が得意な子どもは、活発に動きながらハンドボールを楽しんでいた。第1時のスキルアップドリルの三角パスやランニング三角パスで、パスを投げる時には相手の胸に取りやすい強さで投げることを、パスを捕る時には相手に手のひらに向けてボールを包み込むように捕ることを技能のポイントとして子どもたちに伝えた。また、ランニング三角パスでは、走っている相手の少し先をねらってパスを投げることを技能のポイントとして伝えた。第2時では、前時に教えた投捕のポイントを意識してスキルアップドリルやタスクゲームの練習に取り組む子どもが多く見られた。

タスクゲームでも、相手の胸にうまく投げられなかったり、ボールをはじいてとることができなかったりして、パスがうまくつながらないグループが多かった。また、ボールを持った子どもが、パスの受けることができる仲間を見つけることができなくて動きが止まってしまうたり、パスを無理やり投げて、相手にカットされたりする場面が多く見られた。また、ボールを持っていない時に、パスを受けることのできる場所に動くことができた子どもは少数だった。ボールを持っていない時にパスを受けるための効果的な動き方がわからずに、まったく動くことができずにいる子どもも見られた。

活動の様子（5／8時）

徐々に三角パスで投捕の技能に高まりが見えて、それに伴ってタスクゲームでもパスのミスが減りシュートチャンスまでパスがつながるようになってきた。しかし、投捕の技能が低位の子どもは、ボールを捕る時に止まってしかボールを捕れずにいた。

第3・4時のタスクゲームで、パスを受けるための効果的な動きをみんなで考えさせた。子どもたちからは、「ディフェンスの裏のシュートエリアや、コートサイドが空いているのでそこに走りこんでパスを受けるとよい」という意見が出た。また、「パスを投げたらすぐ動くとディフェンスを振りきることができる」という意見も出た。第5時のタスクゲームで考えた動きを試そうとする子どもが増え、動き方がわからず止まってしまう子どもは見られなくなった。チャレンジゲームで、Aチームが初めてチーム全員が1点以上取る「ビンゴボーナス」を達成し、チームのみんなで喜びを爆発させていた。



タスクゲームⅠ
ゴール方向の空いた場所に動いてパスをつなぐ場面

活動の様子（6／8時）

タスクゲームでは、第6時からディフェンスの人数を3人にして、チャレンジゲームと同じ状態で行わせた。人数を増やした当初は、パスを受けることのできる場所が探せなくなったり、パスを投げる仲間を見つけることができなかつたりして、動きが止まってしまうと予想した。しかし、多くの子どもが、パスを受けることのできる空いた場所に素早く動いてタスクゲームに取り組んでいた。特に、ボールを持っていない人が、ディフェンスを追い越して裏に素早く動いたり、チームで役割を決めて、サイドに走りこむ仲間を決めたりしながら何度もタスクゲームに取り組んでいた。しかし、ボールを持った時に、シュートチャンスにつながりそうなゴール方向に動いた仲間を見つけてパスを出すことがなかなかできない場面も見られた。第6時の最後に、パスが繋がらなかった場面を例示して、ディフェンスがマークに付く前にパスを投げる相手を素早く判断することや、広い視野を意識してサイドやディフェンスの裏などゴールに近い仲間を見つけてパスをすることなどが大切であること伝えた。

活動の様子（8／8時）

どのチームも素早いパスの受け渡しで、スピーディなゲームを展開できるようになってきた。また、すべてのチームがビンゴボーナスをねらいボールを持っていない子どもがどの子どもも積極的にパスを受けようと動くことができている。ディフェンスの裏やサイドの空いた場所に動こうとする子どもが多くなったが、ディフェンスもそれに対応できるようになってきたので、他の空いた場所に素早く移動しなおすことができない子どもは、パスを受ける回数が減っていた。ディフェンスにパスをカットされたりする場面も前時と比べて多くなり、新たに課題となる動きが出てきた。

(2) 自分の動きを確かめることができる振り返り活動の工夫

活動の様子（2／8時）

AチームのB児は、事前のアンケートで、「ボール運動は、ボールをうまく投げたり捕ったりできないから嫌い。」と回答した子どもである。第1時の試しのゲームや、第2時でチャレンジゲームでは、ボールがうまく捕れないので仲間からパスが回ってこないことに加えて、動き方がわからないためか、ほとんど動くことなく授業を過ごしていた。振り返りタイムでは、ボールを持った時の動きの評価をレベル1と自己評価し、ボールを持っていない時の動きの課題を「しっかりパスが取れるようにする。」という記述をした。また、感想には、「ミスをするとかプテンのC君が怖くなるから楽しくなかった。」と萎縮した様子だった。C児は、チームの仲間が思うように動いてくれないで、パスができないことや点が取れないことに対してイライラしていた。そこで、仲間がパスを受けることができるスペースに走るように指示を出してみよう。」と声掛けと朱書きでアドバイスした。

DチームのE児もボール運動が嫌いと言った子どもで、「声をかけてもあまりボールが回ってこないし、頑張ってもなかなかシュートやパスがうまくできないところ。」と理由を上げた。E児はボールを持っていない時の動きを「もっと動いて動きを分かるようにしたい。」と記述したものの、具体的にどのように動いたらパスを受けられるかを考えて書くことができなかった。そこで「ディフェンスが近くにいるとパスが来ないから、ディフェンスのいないスペースに動いてみよう。」と朱書きした。



振り返りタイム
本時の動きを振り返り、課題を考える

【B児の記述】
しっかりとパスが取れるようにする

【教師の朱書き】
手のひらを相手に向けてボールを包み込むように捕ってみよう。パスをもらうときは、ディフェンスがいない場所を探してそこに動いてみよう。

【E児の記述】
もっと動いて、動きを分かるようにしたい

【教師の朱書き】
ディフェンスが近くにいるときはパスがもらえないよ。ディフェンスのいないスペースに動いてパスをもらおう

活動の様子（5／8時）

授業の初めに、ディフェンスの裏やサイドの空いている場所に動くという模範的な子どもの課題を全体に紹介し、ゴール方向に向かってパスをつなげていく動きを確認した。C児は、チームの仲間にボールの捕り方やパスを受けることができる動き方など、丁寧に指示を出す姿が見られるようになった。A児には、コートサイドのディフェンスのいない場所に動くように指示を出していた。チームの仲間にも、「空いた場所にみんなが動くとビンゴボーナスが取れるよ。」と声をかけていた。C児はビンゴボーナスの達成を目指して、仲間全員が得点できるようにディフェンスのいない仲間を判断よく見つけて、パスを投げていた。第5時では、全チームの中でAチームが初めてビンゴボーナスを達成することができた。A児も得点することができ、学習シートでの自己評価では、ボールを持っていない時の動きをレベル2と評価していた。次時の課題にも「ゴール前の敵がいないスペースに走って行ってパスをもらう。」と記述していた。A児は動き出しが遅くパスを受けることができない場面が目立っていたので「素早く走りこんでボールをもらってみよう。」と朱書きした。

【A児の記述】
ゴール前の敵がいないスペースにパスをもらう

【教師の朱書き】
ディフェンスが近くにいるときはパスがもらえないよ。ゴール前のディフェンスのいないスペースに動いてパスをもらう

E児は、前時の振り返りで、ボールを持っていない時の動きをディフェンスのいないスペースに動いてボールをもらえるようにしたい。」と記述していたので、動きを認める朱書きをした。第5時では、積極的にディフェンスのいない場所へ移動して、パスを受けようとしていた。しかし、仲間からのパスがE児に来ることは少なかった。また、ボールを持っている仲間の周りでパスを受けようとしていた。チャレンジゲームの途中で、「声を出して自分の位置を知らせてごらん。」「ゴールの近くのあいているスペースに動いてごらん。」とアドバイスした。授業後の振り返りでも、「走りこむ動きがまだできていないから、走りこんでパスをもらう。」と記しており、「パスを受けることができそうな場所に走りこむときに声を出して仲間知らせてみよう。」と朱書きした。

【E児の記述】
走りこむ動きがまだできていないから、走りこんでパスをもらう。

【教師の朱書き】
パスがもらえそうな場所に走りこむときに声を出して仲間知らせてみよう

活動の様子（8／8時）

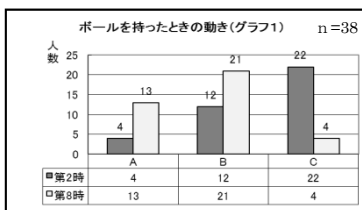
B児は、パスを受けようとした空いた場所を探して動こうとするが、なかなかパスを受けることができなかった。前時よりもディフェンスのマークが厳しくなり、マークを外したり、再度、空いた場所へ移動しなおしたりする動きができずにいたことが原因であるようだった。振り返りでは、ボールを持っていない時の動きをレベル1と自己評価し、「パスがもらえそうなところに動く。」と次時への課題を漠然と記述していた。朱書きには、「仲間がパスを投げるタイミングごとに、空いたところに素早く走りこむとマークをふりきることができるよ。」と記した。

E児は、走りこんでパスを受ける動きにまで高まらなかったが、空いた場所に動いた時には、仲間知らせようと声を出しながらチャレンジゲームに臨んでいた。以前よりパスを受ける回数も増え、チームのビンゴボーナス達成に貢献することができ、喜びの表情を見せていた。

4 実践の結果どんなことが明らかになったか（○）、また課題は何か（●）。

(1) 中心となる動きを身に付けることができる授業の流れの工夫

○ グラフ1は、チャレンジゲーム中におけるボールを持った時の動きを、第2時と第8時で評価したものである。第2時と比べて、

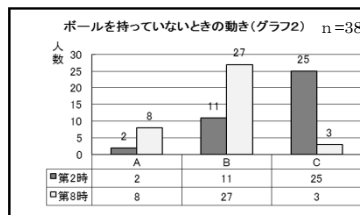


A評価：ゴール前でパスをもらってシュートを入れたり、ディフェンスのいないスペースにいる仲間にパスをつなげたりすることができた。
B評価：ゴール前でパスをもらって、ゴールをねらおうとしたり、ディフェンスのいないスペースにいる仲間を見つけてパスをしようとしたりすることができた。
C評価：パスを受けてもシュートをねらおうとしたりマークのいない仲間を見つけることができなかった。

第8時の動きはC評価の動きだった子どもが減って、B評価、A評価の動きに高まったことが分かった。スキルアップドリルで身に付けた基本的なボール操作の技能が、チャレンジゲ

ームでもその動きを生かすことができたことが要因として考えられる。また、タスクゲームで、攻撃の練習を連続して行い、パスを受ける場所に動いている仲間に判断よくパスをすることや、ゴール前でパスを受けたらまずシュートを打つという動きを繰り返し行ったことが、動きが高まった要因であると考え。

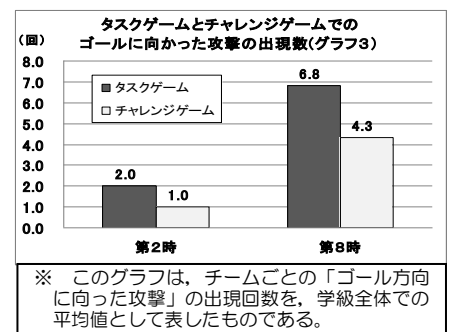
グラフ2は、チャレンジゲーム中における、ボールを持っていない時の動きを、第2時と第8時で評価したものである。第2時と比べて、



A評価：(シュートを打つために) ゴール前でディフェンスがいないスペースに走りこんでパスをもらおうとしたり、(パスをつなげるために) ディフェンスのいないスペースに走りこんでパスをもらおうとしたりすることができた。
 B評価：(シュートを打つために) ゴール前でディフェンスがいないスペースでパスをもらおうとしたり、(パスをつなげるために) ディフェンスのいないスペースでパスをもらおうとしたりすることができた。
 C評価：パスをもらえそうなスペースに動くことができなかった。

第8時での子どもの動きは、B評価、A評価の動きに高まったことが分かった。これは、タスクゲームで、パスを受けるためにディフェンスのいない、空いている場所を見つけて動くことを意識して、繰り返し練習した成果がチャレンジゲームでも発揮されたと考える。

- グラフ3は、タスクゲームとチャレンジゲームでのゴールに向かって攻撃した回数を、学級全体の平均で表したものである。第8時では、タスクゲームで見られたゴールに向かって攻撃が、チャレンジゲームでも数多くみられるようになった。



このことから、ゲームの中で身に付けさせたい中心となる動きを効果的に身に付けるうえで、タスクゲームは効果があったと考える。

- ディフェンスのマークをする動きが高まってくると、マークを外したり、ディフェンスよりも早く判断したり動いたりすることができていない子どもはパスを受けることができなくなっていた。ディフェンスに守られたら、違う場所に素早く動こうしたり、マークを外す動きを意識させたりすることも必要だったと感じた。

(2) 自分の動きを確かめることができる振り返り活動の工夫

- ボール運動が苦手と感じていたB児やE児のように、パスを受けるための動き方がわからずにいた子どもには、次時に課題となる動きを考えさせたことで、目指す動き方を意識させることができ、授業でもその動きを取り入れて練習することができるようになった。また、修正すべき課題や、漠然とした課題を記述している子どもには、朱書きして明確に動きを提示したことにより、子どもに正しい動き方を意識させることができた。
- 単元終了後に、今回のハンドボールの授業の感想文を自由に書かせたところ、朱書きやアドバイスの声掛けが動き方を知るために有効だったと回答している子どもが何人もいた。E児も朱書きが役に立ったと答えた一人だった。

このように、朱書きでアドバイスした動きを、授業の中でも声を掛けて、意識させたことにより、多くの子どもが自信をもって動くことができるようになった。特に動き方に迷いを持っている子どもに対して、朱書きと声掛けによりアドバイスは、自分の考えた課題となる動きをタスクゲームやチャレンジゲームで自信をもって試すきっかけとなったようで、効果があったと考える。

- ボールを持った時の動きと持っていない時の動きを3段階で自己評価させたが、子ども自身が本時の自分の動きを正しくとらえることができなかった。今後は、自分の動きを正しく認識する評価方法を考える必要がある。